

現在は街道から入った細道のほとり安保原地蔵の片すみ闊葉樹の大木の根方に、巾四五樞、厚さ二〇樞、高さ八十樞の長円形の小碑が、訪れる人もいない静けさの中に建っています。

〈第十七話〉

嫁石物語

むかし。

苦麻川左岸の台地や、丘陵は見渡す限り、茅と木の生い茂った昼も薄暗い場所、鹿や兎・狐・狸などのすみかになっていましたので、人々は焼き払っては耕やし、焼き払って耕やすという苦しい焼畑農業をつづけましたので、焼山などの地名がのこっています。

お花さんは、標葉の里でも一番のきりょう良しでしたので二・八（十六才）の齡に是非にとせがまれて嫁入りしました。

雲雀がさえずり、あちこちから山焼きの煙があがり、阿武隈の山脈には春霞みがたなびいています。嫁に来たお花さんには、夫と一緒に楽しい毎日の野良仕事が続いていました。